新刊ライブラリー

石原美奈子 編
『せめぎあう宗教と国家 ―エチオピア 神々の相克と共生』

風響社 2014 年、440 ページ、5000 円＋税

江端希之
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本書の特徴は、エチオピアに存在する多様な宗教的実践を、人類学者ならではの「下からの視点」で横断していくところにある。その視座は、一見するとキリスト教やイスラームといった普遍宗教に覆い尽くされているかに見える表層を突き破り、その奥底にうごめく多様で重層的な「人々によって生きられている宗教実践」の現実態を明らかにしていく。すなわち、本書は歴史化された宗教（キリスト教・イスラーム）のみならず、歴史化（文字化）されてこなかった宗教（精霊崇拝・呪術等の在来信仰）の世界に、深く分け入っていく。

本書は五部構成となっている。「第一部　国家と宗教」（石原美奈子）では、第一章で「国家を支える宗教」としてエチオピア正教を、第二章で「国家に抗う宗教」としてイスラームを取り上げている。二大宗教がエチオピア国家の形成にどのように関与してきたかの歴史をたどり、国家との関係性を論じている。両宗教の共存にも関わる近年の問題として、聖者崇拝やスーフィズムを支持する穏健派イスラームに対し、それらを迷信として否定する急進派イスラームの台頭を挙げている。

「第二部　偏在する信仰」は、南部のマロとボラナにみられる信仰のあり方に焦点を当てている。第三章「邪視・変身・食人」（藤本武）は、プロテスタントへの改宗が進み、見え辛くなりつつあるマロ社会の在来信仰（妖術・邪術・呪術）について紹介している。アフリカ・中東をも視野に入れた比較を行いながら、エチオピアにおける呪術的信仰の特異性を指摘している。第四章「福因と災因」（田川玄）は、オロモの一支族であるボラナを取り上げている。ガダ（年齢階梯システム）と密接に関わるボラナの宗教的世界を、「福因論」と「災因論」という枠組みを利用しながら分析している。

「第三部　精霊と権力装置」は、南西部のホールとカファにみられる精霊崇拝についての対照的な報告である。精霊崇拝が、社会政治環境の変化に伴い、一方は受容され、一方は破棄されつつある状況を描いている。第五章「精霊憑依と新たな世界構築の技法」（宮脇幸生）では、外部から流入した精霊憑依カルト（アヤナ・カルト）が、ホール社会に定着する過程を紹介している。その過程とは、ホール社会における矛盾や葛藤に悩む人々が、「新たな対抗的世界を構築する技法の普及プロセスである」と分析している。第六章「世俗を生きる霊媒師」（吉田早悠里）では、カファ社会の精霊エコ信仰が、各時代の政治体制の中でどのような状況に置かれ、その中でどのように実践され、社会的地位が変遷してきたのかをたどっている。エコ信仰は衰退しつつあるかに見えるが、霊媒師アラモは時代の変化に合わせてしたたかに生き延び、信仰ではなく文化として生き延びていく可能性が示唆されている。

「第四部　対立と共存」は、南西部の二つの社会における世界宗教をめぐる対立と共存について取り上げている。第七章「対立・干渉・無関心」（増田研）は、バ

ンナにおけるプロテスタントの普及と、それに伴って生じる非キリスト教徒との対立、干渉、無関心という、社会関係の「振れ幅」を記述している。第八章「対立を緩和する社会関係」（松村圭一郎）は、ジンマの農村で平和裏に共存するムスリムとキリスト教徒の社会関係を取り上げている。ここでの宗教の差異は横断可能なもので、対立や紛争の原因とはならず、むしろ多様な選択肢を提供する潜在的な可能性を持つことを指摘している。宗教の差異とは、複数の社会関係の中の一つの境界に過ぎないことが描かれている。

「第五部　偏在する神性を求めて」は、聖地巡礼・聖者廟参詣を取り上げている。第九章「ショワ・オロモの悩みと対処」（松波康男）では、オロモ農村部におけるイスラーム聖人崇拝や精霊崇拝に関わる聖地を紹介している。これらの聖地では、悩みを抱えた人々が共に祈りあうことで、宗教や民族を超えた「共同性」が生じていると分析している。

本書は、世界宗教に対して「宗教学的な」（ないし神学的な）知識のみを有する日本の宗教関係者、あるいは宗教学関係者にもぜひ読んでもらいたい作品である。キリスト教やイスラームに対する先入観（紋切り型の理解）というものが、本書を読むことで崩れ去り、宗教的世界の豊饒性が読者の眼前に一気に開けてくることだろう。

（えばた　まれゆき）

内藤直樹・山北輝裕　編
『社会的包摂／排除の人類学
—開発・難民・福祉』

昭和堂、2014 年、255 ページ、2500 円＋税

村橋勲
大阪大学大学院人間科学研究科

本書は、開発・難民・福祉という複数の領域において、「アサイラム空間」という場に注目し、社会的包摂／排除がどのように形成され、進行しているかを検討している。「アサイラム空間」とは、「難民キャンプ・先住民定住地・障碍者福祉施設・児童福祉施設などの何らかの『全制的施設（total institutions）』、およびそれがかかわる地域社会・市場・制度・組織などが複雑に絡み合うなかで形成される包摂と排除が入り組んだ空間」（本書 1 ページ）を指している。従来の人類学が、国家の影響が小さい地方や世界経済の周縁地域をフィールドとしてきたのに対し、本書は、大規模経済開発の現場、難民収容施設、医療機関、福祉施設といった公権力が強く作用する空間に注目し、そこに関わるさまざまな当事者が、公権力や市場とどのような関係を創出、維持しつつ、生活空間を構築しているかを描き出している。

本書のタイトルである「社会的排除（social exclusion）」は、1980 年代にヨーロッパが直面した新たな貧困問題を分析するために生み出された概念である。当時のヨーロッパでは技術革新と経済構造改革が進む一方、若年長期失業者や移民労働者の生活水準の低下が社会問題と認識されるようになっていた。また、新たな貧困層は、エスニシティ、人種、宗教、言語、ジェンダーとも強い関連性があったため、貧困問題は、単に経済的な問題ではなく、より多元的な要因に起因すると考えられるようになった。宮崎（2014）は、「貧困」が、経済的な不足のみに焦点を当てる概念であるのに対し、「社会的排除」という概念は、経済的な指標に加えて、標準的な生活を維持するための資源の不足や社会への参加に焦点を当てている点に大きな違いがあると主張する。また、前者は、ある時点での経済状態に注目し、静態的な分析を主とするが、後者は、資源の

不足や関係性の欠如に至る過程に注目し、人々が社会的、経済的、政治的にどのように締め出されているかを動態的に捉えようとする、という特徴がある（宮崎2014）。一方、「社会的包摂（social inclusion）」は、「社会的排除」に対置される概念であり、「社会的排除」を解決するための政策の理念を示す用語として使われるようになった。

各章の概要は以下のとおりである。まず、第Ⅰ部（第1章から第4章）では、開発が進行する場に生きる牧畜民や狩猟採集民が直面している変化と彼らの対応について書かれている。第Ⅱ部（第5章から第8章）では、難民というグローバルな他者が庇護国で経験する社会的排除と彼らが新たに構築した地域社会との紐帯や生計手段、そして、日本に再定住した難民と地域社会とのインフォーマルなネットワークについて触れられている。そして、第Ⅲ部（第9章から第12章）では、日本国内のホームレスや日雇い労働者を対象にした自立支援センター、そして精神病やハンセン病の患者が暮らす福祉施設において、制度的包摂／排除とは別の形で日常的包摂／排除が起きていることを明らかにしている。

ここでは、アフリカにおける開発と難民に関する4つの章を紹介する。第1章で、内藤は、ケニア東部州のウシ・ラクダ牧畜民、アリアールの調査を進めるなかで、「伝統的な社会」と思われたフィールド村が、カソリック・ミッションの拠点の「発展」する町を避け、遠隔地に移住した人たちによって築かれた集落であることに気付いた。彼は、フィールド村の歴史を過去の開発プロジェクトとの関連から再構成し、開発プロジェクトがもたらした町周辺の人口増加と住民間のコンフリクトが、町に住む牧畜民の再牧畜化という再帰的な実践をもたらしたと主張する。アリアールのように、現代のアフリカの農村では、複数の開発プロジェクトを経験してきた人々が別のプロジェクトを経験していることが珍しくない。本章は、開発の現場が異文化間の交渉・葛藤の場であり、開発プロジェクトが目指す「発展」と地域住民が求める「発展」とが必ずしも一致しないことを示している。

第2章で、佐川は、牧畜民ダサネッチが居住するエチオピア西南部における大規模開発をめぐる開発と伝統の対立に注目する。エチオピア政府は、2006年からオモ川上流部に巨大ダムの建設を進めているが、ダム完成後は、下流域に肥沃な土壌をもたらしてきた氾濫がなくなり、ダサネッチの生業に決定的な打撃を与えると予想されている。また、外国企業が農場開発を目的にダサネッチの放牧地や居住地を買い占め、彼らを半強制的に移住させるという事態も進行している。現在まで、政府主導の開発事業は地域住民に対する十分な補償や利益供与をしていない。それに対して、国際NGOは、開発が地域住民の伝統的な生活を脅かすものだとして強く批判している。一方、佐川は、開発推進派のローカルエリート、開発容認派の長老、そして強硬な開発反対派の若者がいるように、ダサネッチのなかにも複数の声があり一枚岩ではないと指摘している。そのうえで、国際NGOは開発反対派の声のみをダサネッチの「真の声」として代弁しており、彼らの開発批判が、当事者の視点抜きに「開発の促進か伝統の保護か」というニ者択一的な議論の枠組みを作っていると批判している。

第5章と第6章は、いずれもザンビアにおけるアンゴラからの避難民を取り上げている。第5章で、中山が調査したマユクワユクワ定住村は、1966年に開設され独立闘争とその後の内戦から逃れた難民を受け入れてきた。マユクワユクワ定住村では、村内の学校や診療所、マーケットといった都市機能が難民だけでなく地域住民に便益をもたらし、地域住民が難民といっしょに村内の施設を利用するようになった。また、難民も村外に出て日雇い労働や酒の販売によって現金収入を獲得するなど、難民と地域住民とを隔てる境界は希薄になっている。中山によれば、難民収容施設は、「国民ではない者」を包摂する空間であると同時に、彼らを遠隔地に隔離しておくための排除装置でもあるが、本章は、難民の包摂と排除が、難民と地域住民双方の日常的実践を通して変化し、両者の間に新たな関係性が構築されていることを物語っている。

一方、第6章で、村尾は人道支援に依存しない自主的定着難民に注目している。一般に、自主定着難民は、経済的な自立を達成し、かつ地域社会に包摂されていると考えられ、国際社会から「難民の成功例」と捉えられている。しかし、村尾によれば、彼らは地域社会

から社会的、経済的に排除されているという。たとえば、自主的定着難民が居住するザンビア西部州では、土着の首長が住民への土地配分を決める伝統的な土地支配制度を政府が容認している。土地の首長は、歴史的に、アンゴラ移住民に肥沃なザンベジ川氾濫原の利用を許可してこなかったため、移住民たちは林が広がる痩せた土地を利用するしかなかった。そのため、彼らは、アンゴラで行っていたトウモロコシ栽培を放棄し、焼畑耕作によるキャッサバ栽培に依存している。現在、主食であり現金収入源でもあるキャッサバは唯一の資源として彼らの生計を支えているが、これはキャッサバ生産が維持できなくなれば、生計の維持が困難になることを意味している。このことから、村尾は、自主的定着難民を「難民の成功例」として称揚する言説が、彼らの自立や創意工夫の限界を看過し続けることになるだろうと論じている。

最後に、本書全体を通して見えてくる「社会的包摂／排除」の概念と実相について要約する。「社会的包摂／排除」という概念は、元来、ヨーロッパにおける新たな貧困問題を分析するなかで生み出されたものであるが、本書は、現代のアフリカや日本においても、同様の概念が適用可能であることを示唆している。また、各章の詳細な事例は、社会的排除を解決しようとする制度的包摂が別の形での排除を生み出す一方で、隔離された人たちが日常的包摂の場を再構築するといった「排除と包摂の複雑なスパイラル」（本文 243 ページ）とでもいうべき動態を描き出している。包摂と排除は、二項対立的に捉えられがちだが、実はコインの表裏の関係にあり、ある人々を選別し包摂することが、そこから抜け落ちる人々を排除することにつながっていく。国家や地域社会による包摂／排除によって形成された「アサイラム空間」は、ますますグローバル化しており、その場に関わる当事者たちの葛藤、協働、交渉、相互作用によって多様な相貌を見せている。

参考文献

宮崎理、2014、「ヨーロッパにおける社会的排除概念―ポストコロニアルな議論との関連において」、北星学園大学大学院論集第 5 号（通巻第 17 号）、35-47 頁。

（むらはし　いさお）

宍戸健一　著
『アフリカ紛争国スーダンの復興にかける―復興支援 1500 日の記録』
佐伯印刷、2013 年、222 ページ、1500 円＋税

村橋勲
大阪大学大学院人間科学研究科

本書は、内戦終結後のスーダンにおいて、JICA（国際協力機構）が取り組んだ復興支援と地域開発支援の活動記録である。スーダンは独立前年の 1955 年に南部で勃発した叛乱を皮切りに南北間で 2 度の激しい内戦を経験した。2005 年の CPA（包括和平協定）で第二次内戦は終結し、2011 年、南部スーダンは「南スーダン共和国」として分離独立を果たした。長期にわたる内戦のため、首都ジュバにおいてもインフラ整備の遅れや衛生状態の悪さが際立っている。著者の宍戸氏は、CPA（包括和平協定）締結後の 2007 年に JICA スーダン駐在員事務所長として首都ハルツームに赴任し、2011 年までスーダン全体の支援事業に携わってきた。各章では、南北スーダンでの著者の経験から、試行錯誤の連続となった各地域での支援活動の内実や対象となった地域の様子、そして地域住民の反応などが描かれている。

プロローグで、2011 年 7 月に著者が出席した南スーダンの独立式典での国民の熱狂ぶりにふれた後、第 1

章では、スーダンで南北内戦をはじめ長期間におよぶ紛争が多く発生した歴史的背景が説明されている。第2章では、1993年に閉鎖された現地事務所の再開に向けた準備と現地の様子について書かれている。日本は東西冷戦下の1960年代からスーダンを西側諸国の一員として積極的に支援してきた。しかし、激化した南北紛争で重大な人権侵害があったとして、欧米諸国が対スーダン援助を相次いで凍結し、1992年には日本も政府開発援助（ODA）を停止した。本章では、国連や世界銀行による合同評価調査団の派遣とスーダン支援再開の動きについて書かれている。

第3章では、ハルツームとジュバにおける現地事務所立ち上げの苦労について書かれている。ここでは、内戦終結後のジュバの状況についても紹介されており、短期間でジュバの人口が急増し、市街地が急速に拡大していったことがわかる。第4章では、南部スーダンへの支援事業として行われたジュバ河川港の整備、除隊兵士を含めた職業訓練、農業、教育、保健分野での人材育成について詳述されている。南部スーダン暫定自治政府と州政府との軋轢、職業訓練事業の拡充で障壁となった欧米の支援団体との意見の違いなどが書かれており、支援事業が決定されるプロセスが垣間見える点が興味深い。

第5章と第6章は、北部スーダンへ活動の舞台が変わる。北部スーダンでの支援は、「東西南北をバランスよく支援すること」というJICAのスーダン支援の方針に沿ったものである。第5章では、北部スーダンにおける母子保健や水供給といった社会サービスの提供とコメの増産・輸出に向けた支援事業について、第6章では、ダルフール地方、東部スーダン、南部暫定統治3地域（南コルドファン州・青ナイル州・アビエイ地区）における、母子保健と職業訓練の取り組みについて紹介している。これらの支援事業のなかで、著者が大きな期待を寄せているのが、2010年から始まった農業再活性化プロジェクトである。このプロジェクトでは、アフリカ系の稲とアジア系の稲を交配して作られた新品種「ネリカ米」の普及活動が進められている。著者によれば、スーダンは、稲作のポテンシャルが非常に大きく、ソルガムや他の作物と比べても「ネリカ米」は十分な収益性が見込まれる、ということである。こうした大規模農業開発の背景には、国際的な農産品価格の高騰と石油に代わる収入源を確保したいというスーダン政府の意向もあると考えられる。

第7章は、再び南部スーダンでの活動に戻り、2009年から始まったジュバ市内の橋梁整備と新ナイル川橋建設プロジェクト、そして、2010年の総選挙の結果、南部独立の可能性が現実味を帯びるなか、国家の機能強化を図る取り組みのひとつである税関支援について事業の推移が紹介されている。著者は、JICAにとって新しい国家の建設に携わるということは稀有の経験であり、欧米諸国や中国がさまざまな支援事業を進めるなか、各国が手がけていない事業に迅速に着手していく必要性があったと述べている。

エピローグでは、著者が考えるJICAとしての国際協力のあり方を明確に述べている。それは、1. 都市と地方の支援のバランス、2. 地域のニーズに合わせた支援活動、3. 活動体制の迅速な構築、である。そのうえで、南北スーダンへの支援は、スーダンからの石油資源の安定確保とスーダンの農業生産力の向上のために必要であると指摘する。さらに、日本の国際的地位の向上という点からも、南北スーダンへの支援は日本の国益にかなうと結論づけている。

本書は、JICAによるプロジェクト記録集というよりは、事務所長として赴任した著者が、自身の経験や意見にもとづいて対スーダン支援を振り返るものである。あとがきで、「スーダン側を見すぎて東京のJICA本部との間で紛争を起こしたことも一度や二度ではなかった」と記しているように、著者の意見は必ずしもJICA本部の意見ではなかったようである。しかし、著者が貫いてきた「自助努力の尊重」という姿勢は財政的な支援だけを求める被支援国の行政組織に対して、自分たちの手で地域開発を実施することの重要性を示すことにつながったと考えられる。一方で、地域による支援の格差、被支援国から指摘されている日本人専門家の高すぎる人件費、そして、住民の要望である迅速な事業展開は、解決すべき課題として残されているように思われる。

最後に、本書以降の南スーダンの状況について付記しておきたい。2013年12月以降、南スーダン国内では新たな戦闘が発生し、現在も実質的な内戦状態にあ

る。プロローグで触れられているように、独立式典で、サルバ・キール大統領は、「夜は長すぎるが、朝は必ずやってくる」というアフリカの諺を引用しながら、「今、私たちにはトンネルの出口の光が見えた、これを祝おう、そして一緒に正しい道を歩もう」と演説した。現在、政権側と反乱軍側との和平交渉が一向に進まないなか、「暗いトンネルから抜け出す日」がいつ来るのだろうか。そして、戦闘発生後中断されている南スーダンでの JICA の活動はいつから再開され、どのように展開されるのだろうか。南スーダンの将来とともに本書以降の JICA の活動の行方にも注目していきたい。

（むらはし　いさお）

松田素二　編
『アフリカ社会を学ぶ人のために』

世界思想社　2014 年、322 ページ、2300 円＋税

吉田早悠里
名古屋大学高等研究院

本書は、人類学、社会学、霊長類学、歴史学、言語学、文学、政治学、経済学、医学、農学などをベースに学際的な活躍をしている第一線のアフリカニストであり、フィールドワーカーでもある執筆者によって著されたものである。編者の松田素二の言葉を借りれば、本書はアフリカの苦難と希望、問題点と可能性の両方を、アフリカ社会の「現場」から見て、考え、感じる新たな立場を提案しようという想いで作り上げられている。

本書は 5 部から構成されている。章立ては、第 1 部　多様性を学ぶ（民族と文化／言語／生態環境／生業）、第 2 部　過去を学ぶ（人類誕生／古王国／奴隷交易／植民地支配と独立）、第 3 部　同時代性を学ぶ（ポピュラーアート／ライフスタイル／結婚と家族／宗教生活）、第 4 部　困難を学ぶ（政治的動乱／経済の激動と開発援助／自然保護と地域住民／感染症）、第 5 部　希望を学ぶ（在来農業／相互扶助／紛争処理／多文化共生）となっている。それぞれの章のタイトルからもわかるように、本書は「5 つの学び」を柱としている。

アフリカに関する概論書は数多くあるが、それらと本書を分けるのは、本書の基本的な姿勢が従来のアフリカへのまなざしを再検討し、アフリカ社会から学ぼうとする点にある。そもそも、アフリカはどのようなイメージを付与されてきたのか。本書の序では、アフリカに対する認識が再検討されている。アフリカは、ヨーロッパ世界による 15 世紀からはじまる奴隷貿易と、19 世紀以降の植民地支配によって暴力的かつ体系的に歪められてきた。そして独立後は、民族紛争や貧困・低開発に苦しめられ、「未開と野蛮」と表象された「絶望の大陸」としてのイメージが 1990 年代まで続いた。20 世紀末以降、アフリカは世界経済のなかでもっとも高い経済成長を遂げ、世界に対するアフリカのイメージは「資源供給」「魅力的市場」へ、そして「希望の大陸」へと変化を遂げているようにみえる。松田は、このようなアフリカに対する認識は、世界システムのポリティクスの力のなかで、世界が数世紀にわたって意識的かつ体系的に作り出したものであるという。本書は、このような認識を、同じく数世紀にわたってアフリカ社会が創造してきた知恵と実践、すなわち「アフリカの潜在力」に着目することで乗り越えようと試みるものである。

「アフリカの潜在力」とは、アフリカ社会が、外部世界からの影響を受けるなかで常に衝突や接合を繰り返しつつ、そこで生じる問題を解決するための能力を備えていることを前提とした開放的で動態的な視点である。 各章で論じられているように、アフリカには多く

の民族が暮らしている。国境と民族分布や言語分布は必ずしも一致しない。もともと、人類がアフリカで誕生して以来、人類は数十万年をかけてユーラシア、アジア、アメリカ、オセアニアへと拡散してきた。さまざまな言語や文化を備えた人々が移動や交易を通して交流するなかで、人々は包括性と流動性、複数性と多重性、混沌性とブリコラージュ性といった特徴を有した知識や実践を育み、さまざまな事柄に対処してきた。

このような知識や実践を、多角的に学ぶことができるのが本書である。各章では、それぞれのテーマの概要がわかりやすくまとめられ、個別の事例によって具体的に深められている。たとえば、ポピュラーアートを著した岡崎彰は、「アフリカ文学」や、近年、急速に台頭してきた「ノリウッド」系の大衆映画などを提示しながら、アフリカ社会特有の人間関係のあり方を知るうえで、人びとの語る力、人を読む力に注目することが重要であるという。また、松田素二は、今日のアフリカにおいて携帯電話が急速に普及するなかで、それが人びとの送金手段や求職の機会をひろげ、都市世界と農村世界をリアルタイムで直結する役割を果たしている状況を描き出している。人、モノ、情報が地域を超え、新たな価値観との出会いが増えている同時代のアフリカにおいて、何が変わり、何が変わっていないのか、具体的な事例から検討することができるだろう。

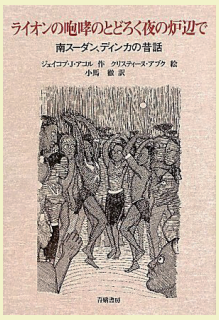
各部の終わりにはコラムが設けられているほか、巻末には「アフリカ社会を学ぶ人のための国別データシート」「アフリカ社会を学ぶ人のための必読文献リスト」が収録されている。文献リストで取り上げられているものの多くは邦文であるため、読者にとって手に取りやすいだろう。また、読者は、本書を通して自らのアフリカに対するまなざし、そして自らの暮らす社会を見つめなおすことになるだろう。

（よしだ　さゆり）

ジェイコブ・J・アコル　著、小馬徹　訳
『ライオンの咆哮のとどろく夜の炉辺で
—南スーダン、ディンカの昔話』

青娥書房、2010 年、191 ページ、1500 円＋税

吉田早悠里
名古屋大学高等研究院



本書は、南スーダンのディンカに生まれた著者が、子どものころに村で聞いた神話と民話をおさめたものである。2011 年 7 月にアフリカ大陸の 54 番目の国家として独立した南スーダン。しかし、現在も治安は安定せず、各地で戦闘が続き、避難民が出ている状況にある。著者は、難民キャンプを転々としながら教育を受け、大学に進学して学位を取得した。その後、ジャーナリスト兼援助団体職員としてアフリカ各地をめぐった経験を持つ。

物語の舞台となるディンカの土地は、白ナイルが流れ、緩やかに北へと傾斜する南スーダンの大盆地に位置している。牛の民であるディンカは、その土地に広範囲に分散して居住している。男たちは成人式で自らと同じ名を持つ牛を得て、詩を朗誦し、牛の角を模してダンスを踊り、牛を愛おしむ。人々はいかなる場合においても牧畜を行うことに愛着を抱いており、雨季と乾季にあわせて永続的な居住地と川岸の放牧地の間を行き来して生活している。

本書には、15 の物語がおさめられている。冒頭におさめられている「氏族はどのように名前を得たか」は、ディンカの始原の物語である。もともとディンカは川の水の下に住んでいた。水の下は、病気も死もないが、人口が増加しすぎて窮屈になってきた。そこで、漁槍の長ロンガール・ジエルが、陸地に住めないかどうかを

調べに出かけた。漁槍の長は、聖なる槍を持つ司祭である。ロンガールは、陸地は獣がいて病気と死が存在する危険な土地であるため、人間は陸に住むことはできないことを人々に伝えた。しかし、人々はロンガールを殺してでも陸地へ出ることを選んだ。人々はロンガールを出し抜き、陸地へあがったが、その代償として永遠に水の下では生きることができなくなった。そして、陸地でさまざまな出来事に直面することになった。そこで、人々は身を守るために、それ以前から陸地に棲んでいたほかの動物たちに保護を求めた。これによって、それぞれの氏族が特定の動物や木々、草や昆虫と関係を形成することになったのである。

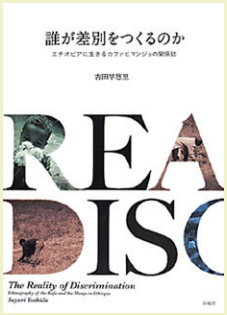
それに続く物語では、ディンカがどのように牛を手に入れたのか、踊りに欠かすことができない太鼓をどのように手に入れたのかといった、ディンカの生活に即した物語が並べられている。また、本書におさめられた物語には、牛、ライオン、狐、ハイエナ、ゾウ、カバ、鳩、駝鳥など、多くの動物が登場する。特に、聖なる槍を求めて手負いのライオンに挑む青年の話である「ライオンのジェルベック」や、正直者で心優しい娘と対照的な性格の姉が登場する「アチェンガークディトゥとアチェンガークティー」では、ディンカ、ライオン、角のない牛の関係が興味深い。このふたつの物語では、ライオンが人間や角のない牛に姿を変えたり、ディンカがライオンに姿を変え、再び人間に戻ったりする。ここからは、自然とディンカの人々の暮らしがとても親密な関係にあることが読み取れる。このほか、年長者の知恵を伝える話など、訓戒的な物語もおさめられている。

本書は、読み物としても楽しめるだけでなく、物語に描かれる神、人間、動物、そして人々の氏族の関係から、ディンカの世界観や社会組織を垣間見ることもできるものとなっている。また、本書を片手に、ディンカに関する民族誌を手に取ってみることも良いだろう。ディンカの暮らしぶりや社会、宗教を知ることで、物語に登場する人物や動物たちの鼓動をより一層感じとることができるはずである。本書が読者の想像力を掻き立て、ディンカの豊かな世界へ誘ってくれることは間違いない。

（よしだ　さゆり）

吉田早悠里　著
『誰が差別をつくるのか —エチオピアに生きるカファとマンジョの関係誌』
春風社　2014 年、371 ページ、5000 円＋税

伊藤義将
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



本書は、エチオピア南西部に生活するオモ系言語を母語とする民族カファと、同じくオモ系の言語を母語とする民族マンジョの間に生じる「差別」の実相を描いたものである。「差別」とは「あるものを正当な理由なしに他よりも低く扱ったり、劣ったものとして不当に扱うことである。たとえば、社会的に排除したり、不平等、不利益な取り扱いをすることである」（本書 23 ページ）。本書で焦点が当てられるマンジョとは、カファが多く暮らすエチオピア南部諸民族州カファ地方を中心に居住する人々である。本書によると、「マンジョはかつて狩猟を主な生業とし、共住する人々とは異なるアイデンティティを有し、差異化されている」（本書 33 ページ）という。

まず第 1 章で著者は、ボツワナに暮らすサンが「先住民」という輸入された概念を利用して、自らの「先住民性」を主張した例などを取り上げる。そこから社会で生じている現象は、その性質よりもその現象に付与された概念によって決定付けられると主張する。カ

ファとマンジョの関係についても 1990 年代に研究者が「差別」という言葉を彼らの関係に当てはめるようになってから、より「差別」を帯びた関係へと変容していったという仮説を提示する。第 2 章で調査対象地域であるエチオピア南西部のカファ地方の概要を説明したのち、第 3 章で、カファがマンジョを差別するという構図が生成されてきた歴史を、聞き取り調査と文献調査から明らかにする。ここでは、政権交代や政策の変化によって忌避関係であったカファとマンジョの関係が、少しずつ「差別」を帯びるようになり、次第に固定されたものへと変容していく様子を描く。

第 4 章で、マンジョが居住する二つの村を取り上げ、より具体的にマンジョの生活を描く。ここで、地理的な条件や学校教育へのアクセスの容易さなどがマンジョの生活を変容させている側面を浮き彫りにし、第 5 章で、カファとマンジョの間に生じるトラブルのすべてが、「差別」という概念に集約されてしまう具体的な事例を提示する。例えば、カファの共同労働にマンジョは参加するが、マンジョの共同労働にカファは参加しない事例、レストランでマンジョが使用する座席と食器はカファが使用するものと分けられている事例、マンジョの子供がカファの子供から学校で同じ机を使うことを拒否される事例などである。これらの事例を、忌避関係や区別と捉えることも可能であるにもかかわらず、海外の研究者や NGO 職員などによって「差別」と一括りにされ、カファとマンジョの関係をより複雑にしている点が第 5 章では強調される。

第 6 章は、近年のマンジョのプロテスタント諸派への改宗過程とその背景を明らかにする。社会主義政権時代にカファとマンジョはエチオピア正教への改宗を迫られたという。しかしマンジョは、カファから教会で同じ椅子に座ることを拒否されたり、食物禁忌などのエチオピア正教の教えになじむことができなかったりして、多くのマンジョが改宗に成功することはなかったという。それがまた、カファがマンジョを「異なる他者」と見なすことに拍車をかけたと著者は分析する。そして、このような苦い経験と社会状況が、日常的実践において人々を平等に扱うプロテスタントへの改宗にマンジョを駆り立てたと著者は主張する。

第 7 章で、カファとの対等な政治活動への参加を求めたマンジョの請願活動の一部始終を描写したのちに、第 8 章で請願が認められなかったことを契機として生じたマンジョによるカファ襲撃事件の実態を明らかにする。著者によると襲撃事件を契機に、NGO や南部諸民族州政府はマンジョを被差別民族と認識し、マンジョに対する支援やアファーマティブ・アクションを活性化させた。そのような活動が皮肉なことに、カファとマンジョの関係を悪化させていると著者は述べる。

第 9 章で、各章の主張を簡潔にまとめたのち、著者は第 10 章で、エチオピア帝国に併合される以前のカファとマンジョの忌避関係は、空間、自然資源などの争奪が生じないような適度な距離感を生じさせる共生の文化的装置だったと分析する。しかし、エチオピア帝国編入後のカファとマンジョの関係は、社会、政治、経済的資源を奪い合う関係へと変化し、結果として欧米の研究者、NGO、行政が「差別」と認識するカファとマンジョの関係が生じたと著者は分析している。更に、「差別」を是正しようとする外部アクターの取り組みが、カファとマンジョの関係をより一層深刻なものにしていると主張する。

聞き取り調査と文献調査から、カファとマンジョの関係の歴史をエチオピア中央政府の動きと関連づけて丁寧に再構成し、現在のカファとマンジョの関係を当事者の何気ない日常会話に立ち現れる言動やインタビュー調査から描き出している点で、本書はカファとマンジョの間に生じる「差別」の実相を明らかにすることに成功している。本書は、エチオピア南西部における民族誌という位置づけであるものの、単なる民族誌として読まれてしまうのは残念である。ヘイトスピーチが横行する現在の日本社会において、本書は日本における「差別」についても考えさせられる。エチオピア研究者や文化人類学者に限らず、差別を考える契機として幅広い人々に手にとって欲しい一冊である。

（いとう　よしまさ）

高倉浩樹・曽我亨 著
『シベリアとアフリカの遊牧民
—極北と砂漠で家畜とともに暮らす』

東北大学出版会 2011 年、205 ページ、2700 円＋税

泉直亮
京都大学アフリカ地域研究資料センター

本書は、2008 年に実施された東北大学東北アジア研究センターでの公開講演「シベリア　アフリカ—トナカイとラクダの遊牧民」の記録を中心に編集されている。その講演でシベリアとアフリカにおけるそれぞれの人類学的調査の成果を発表した高倉氏と曽我氏が共著で、一般・入門者向けに本書を記した。本書はふたりの発表と「総合討論」を収録している。さらに、本書の出版にあたって、巻頭の「まえがき」が高倉氏に、また巻末の「希望としての生業」が曽我氏によって加筆された。

「まえがき」は、「わかりやすくいさぎよい民族誌」という本書の目的を示している。本書は人類学や民族誌の基礎に立ち返って、民族誌的事実それ自体によって他者や他地域を理解すること、あるいは人類学者の調査地について幅広い読者（聴衆）に説明することを目的としている。一般向けの公開講演や書物は、この目的を達成するための適切な機会であるという。

講演の第一部は、曽我氏による「ラクダ牧畜民ガブラの生業文化と社会」、そして第二部は、高倉氏による「トナカイ牧畜民エヴェンの生業文化と技術」である。両者はともに、アフリカとシベリアの自然環境や地勢、牧畜文化といった地域の概要を記述し、それぞれの具体的な現地調査の内容にアプローチしていく。そして、ガブラとエヴェンの人びとが、砂漠や極北という厳しい自然環境のなかで、家畜に依存しながらどのように生計を営み、社会や文化を形成しているのかを説明する。また最後には、国家のなかで地理的にも政治的にも周辺に位置する牧畜民が、現代国家との関係のなかで直面している苦境について述べている。両著者の発表の構成は以上のように統一されているが、他方でそれぞれの調査地の特質が強調されてもいる。たとえば曽我氏は、ガブラ社会で普及しているラクダの信託制度が人びとの社会関係を形成し、リスクを分散する機能をもつことを示した。また高倉氏は、多種の家畜を飼養する熱帯の牧畜社会と比較しながら、シベリアでは人びとがトナカイという一種類の家畜を食糧・移動手段・物質文化と多様に利用していることを、指摘している。

総合討論は、高倉氏、曽我氏、そして司会の瀬川氏による鼎談形式でおこなわれた。討論のテーマは、聴衆からの質問を中心にして構成されており、シベリアと東アフリカの事例を比較しながら議論されている。また巻末の「希望としての生業」では曽我氏は、「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」に関わる生業活動としての牧畜に牧畜社会の希望を見出し、講演会を補足している。そして、「先住民」の概念の再定義をめざす高倉氏の試みなどを例にとりながら、現地の事情に精通した人類学者がグローバルな言説に働きかけることで地域社会に貢献できる可能性を提示している。

先述したとおり本書は、一般・入門者向けの書物であり、専門的な用語や議論などの予備知識がなくても読み進められる。そのため人類学や民族誌、あるいは牧畜民の暮らしに関心をもつ幅広い読者に本書を読んでもらいたい。それと同時に、人類学者を中心とするさまざまな分野の研究者にも、ぜひ本書を勧めたい。近年では研究成果を社会に還元することが強く求められており、市民講座などで研究成果を発表する機会が増えている。そのような研究者にとって本書は、予備知識のない聴衆や読者に対して自分の研究内容を的確に伝える工夫を学び、研究の社会的な意義を考え直すよい機会になるだろう。

「アルプスの少女ハイジ」や「シベリア寒気団」とい

った一般に馴染み深いことがらに触れながら読者を研究内容に引き込み、平易なことばでそれを解説する両著者の手法は見事である。また、国家のなかで周辺化された牧畜民たちが抱える問題点、そして研究者としてその問題の解決をめざす方策を示すことで、問題意識や研究の意義を広く社会と共有しようと試みている。

さらに、本書がシベリアとアフリカというふたつの地域を比較していることも、広く一般的な問題関心について議論する機会を提供している。以上のように、本書は一般読者にとっても研究者にとっても価値の高い一冊である。

（いずみ　なおあき）

石山俊・縄田浩志　編
『アラブのなりわい生態系2　ナツメヤシ』

臨川書店　2013 年、315 ページ、3600 円＋税

髙村美也子
国立民族学博物館

本書は、中東の乾燥地で育まれてきた在来知の研究を基盤として、乾燥地の未来を考えることを目的とした、総合地球環境学研究所プロジェクト『アラブ社会におけるなりわい生態系の研究　―ポスト石油時代に向けて』の研究成果を示すシリーズの一冊である。第二巻の本書は、ナツメヤシに焦点を当てている。本書の著者は、文化人類学、エジプト学、考古学、地理学、植物学、歴史学、生態学など、各分野を代表する研究者である。このような様々な分野の叡智を結集して、オアシスと人間の関係の全体像をナツメヤシを軸として描き出そうとしている。

本書は、序章、終章と 8 章の合計 10 章から構成されている。第 1 章から第 4 章までは、ナツメヤシの歴史的、文化的側面に焦点が当てられている。ここでは、ナツメヤシが乾燥地域にとっていかに重要な樹木であるかを歴史的資料をもとに明らかにしている。第 5 章からは、現在のオアシス、灌漑、なりわいの現状と問題について述べている。本書の視点は、ナツメヤシにおける①植物学・栽培品種、②考古学・歴史学、③宗教学・イスラーム、④灌漑研究、⑤ナツメヤシ利用の文化、の 5 つに大別できる。

1 点目の植物学的視点では、ナツメヤシの植物学的特徴とその多様性が述べられている。まず第 1 章にてナツメヤシの特徴、分布が紹介されている。ナツメヤシは、北アフリカからアラビア半島、西アジアの沿岸部の乾燥地に広く分布している。ナツメヤシの栽培種類とその多様性については第 6 章で述べられている。現在、アルジェリアには 940 品種のナツメヤシがあるとされ、地域、農家とその品種の関係が詳細に示されている。

2 点目の考古学・歴史学の視点では、ナツメヤシの栽培化が扱われている。第 1 章では、土器、ハンムラビ法典、シュメール語、マリ王宮の壁画などの考古学的資料や歴史学的資料から、紀元前 3000 年にはナツメヤシが栽培されていたことを解明している。また、第 2 章では、古代エジプトの建築文化において、ナツメヤシのモチーフが家具や建物の装飾に用いられていたことを論じている。

ナツメヤシの歴代の利用については、紀元前後と、11 世紀から 19 世紀までの文献資料から明らかにされている。例えば、第 3 章では、紀元元年ころにギリシアの医者が記した「薬物誌」は、ローマ帝国東地域においてナツメヤシの実であるデーツが食品でもあり薬品でもあったことを示している。16 世紀ころエジプトに滞在したヨーロッパ人の医師による記録は、ナツメヤシの木の各部位が住宅材料、日常雑貨に加工され利用

されていたこと、デーツが腹部や消化器系、口腔系の薬として利用されていたことを証明している。

3点目の宗教の視点では、ナツメヤシとイスラームの関わりについて明らかにしている。第4章に、聖典クルアーン（コーラン）及びハディース（預言者ムハンマドの言行を記録したもの）とナツメヤシとの関わりについて記載されている。例えば、クルアーンでは、アッラーの「善い言葉」がナツメヤシの木に喩えられている。

4点目のナツメヤシの灌漑に関しては、第5章を中心に灌漑技術の現状が詳述されている。そこでは、古代から利用されてきた地下水路の技術を詳細に解明し、その起源を追っている。そして、第7章では、灌漑技術が伝統的システムから近代的システムへと変化した現状が提示されている。そのうえで、伝統的灌漑システムで行われていた共同労働が、社会紐帯の維持および補強と灌漑技術継承の点で重要であることを再検討し、伝統的灌漑システムを再評価している。

5点目のナツメヤシ文化については、主に第8章にて、5000年続いてきたナツメヤシ利用の現在の状況が論じられている。従来、ナツメヤシの木の各部位は、長年にわたり生活の様々な場面で利用されてきたにもかかわらず、現在、日常生活に使われなくなっていることを指摘している。他方で、ナツメヤシ利用は観光および経済の点で見直され、現在、観光資源としてナツメヤシ利用の復興がはじめられている。

本書が取り上げているナツメヤシを含む多くのヤシ科植物は、赤道を中心とした幅広い地域で利用されている。紹介者は、これまで東アフリカ沿岸部におけるヤシ科植物ココヤシの利用について研究を行ってきた。そこでは、ココヤシが人々の生活に密着し、家屋、飲食、宗教、経済と幅広い側面で重要な意味をなしていることが明らかになっている。ココヤシと、本書で扱われているナツメヤシを含むヤシ科植物が、長年にわたり、それぞれの地域に暮らす人々の生活と密接な関係にあることがうかがえる。

現在、ヤシ科植物は、種類や地域にもよるが、工業製品の普及によっておおむね利用が衰退している。本書は、古より続いてきたナツメヤシ利用が衰退傾向にある一方で、ナツメヤシ利用の価値を再検討することが、生産地域の未来を導く方法の一つであることを論じている。アラブ社会のナツメヤシ利用の価値の見直しのみならず、ヤシ科植物利用全体の再評価を促す一冊となっている。

（たかむら　みやこ）

八塚春名　著
『タンザニアのサンダウェ社会における環境利用と社会関係の変化 ―狩猟採集民社会の変容に関する考察』

松香堂　2012年、249ページ、2400円＋税

角田さら麻
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本書は、タンザニア中部の半乾燥地域に居住する狩猟採集民サンダウェに注目し、狩猟採集をおこなうことで生計を維持していた120年前と現在の彼らの生活を比較して、狩猟採集民社会の変容について考察している。サンダウェはクリック音を特徴とする言語を話したり、居住地に多くの壁画を残したりしていることから、同じくタンザニアに居住するハッツァや南部アフリカのサンとともに「未開狩猟部族」というイメージを抱かれてきた。

本書の著者は、アフリカ地域研究をはじめた当初、自然と強い結びつきをもちながら生活する狩猟採集民、サンダウェの動物観を調査することを目的としていた。

その思いを胸に、著者はタンザニア内陸部に位置するサンダウェの集落に赴いた。現地で著者は、彼らの生業体系が、先行研究で描かれてきた狩猟採集ではなく、農耕を基軸としたものに変化しており、当初予定していた動物観をテーマとした調査から変更をせざるを得ない状況に直面した。このようなことから本書は、(1) サンダウェの居住地域の生態環境の特殊性、(2) 彼らの環境に対する認識と利用の実態、そして (3) 環境利用にともなう社会関係という 3 点から、農耕に軸足を置いて生活をするサンダウェの現在をあきらかにすることで、サンダウェ社会の変容を検討する。

本書の構成は以下のとおりである。

第 1 章　序論
第 2 章　サンダウェの歴史的背景
第 3 章　現代サンダウェの生活背景
第 4 章　サンダウェの自然とのつながり
第 5 章　移住史と現在の土地利用の関係
第 6 章　ニセゴマがつなぐ社会
第 7 章　農地拡大と社会関係の変化
第 8 章　結論

サンダウェの生業活動について、近年の研究のほとんどは「かつては狩猟採集民であった」と記述するだけであり、現在のサンダウェの生業活動に注目することはなかった。このことから、第 1 章で著者はサンダウェについて研究がなされなかった要因は、彼らの農耕への高い依存であると考え、サンダウェ社会における農耕の位置づけと現代のサンダウェ社会をあきらかにする意義を提示している。

第 2 章では、サンダウェの歴史を述べたのちに、先行研究のなかでサンダウェが近隣民族や研究者らから、言語や肌色の違いを理由に差異的に扱われてきたことを指摘している。著者は、他者によるサンダウェのイメージの形成が、彼ら自身のアイデンティティ形成の過程で、生業や社会関係に多少なりとも影響したと考え、次章からこれらを具体的に検証していく。第 3 章では、現在のサンダウェが主食の 9 割、副食の 7 割以上を農作物から得ている、という著者の調査結果から、著者はサンダウェが農耕を中心とした複合的な生業活動のなかに狩猟採集を組み込んでいることを示している。

第 4 章では、調査村内及び周辺地域において、サンダウェが異なる地名を与えたそれぞれの場所の土壌と植生を分析し、サンダウェの環境認識と環境利用を明らかにしている。例えば、サンダウェがナチャと呼ぶ透水性の高い土地には、人びとが乾燥に強いと認識しているトウジンビエを植えている。また、その土地の植生に基づいて名前が付けられている場合もある。バオバブやアカシア属の植物が多く生育する土地は「ハッツァ」「トン」などと呼ばれ、ハチミツ採集に適していると認識されている。

第 5 章では、調査村における人びとの土地利用について、1970 年代にタンザニア全土で実施された集住化政策前後の変化に着目し、現在のサンダウェの土地利用は社会関係に基づいた秩序のもとで成り立っていることをあきらかにしている。散在していたいくつもの村の農民を一度に集住化させた政策は、幹線道路沿いに人口を集中させ、一つの村にいくつものクランを混在させた。集住化以前のサンダウェ社会では、土地の境界線や所有権は曖昧で、人びとは土地の開拓について、「どこにでも開ける」と表現した。けれども、集住化政策によって人口が過密化したサンダウェの居住地では、新たに耕作地を開拓する際、クランやリネージの親族関係が土地利用に反映されて、秩序だった土地利用があることを明らかにしている。

第 6 章では、サンダウェの重要な食材である、ゴマ科の一年生草本ニセゴマ（*Ceratotheca sesamoides*）に着目し、ニセゴマの利用を介して形成・維持されている社会関係があることを指摘している。またニセゴマが社会的に重要な意味をもちつつも、誰しもが容易に入手できる「半栽培」の状態であることを明らかにしている。耕作時の雑草として生えるニセゴマは、食糧が不足しがちな乾期に他者へ要求すれば気軽に提供される。サンダウェ社会にはニセゴマに限らず、気軽な授受をおこなうテレ・クワ・テレという交換システムが根付いている。等量の物々交換を意味するテレ・クワ・テレは、ニセゴマに限らず、2 つの異なる穀類の交換につかわれる。単身で居住している高齢者は、特にニセゴマを他の穀類と頻繁に交換しており、半栽培の状態にあるからこそ、ニセゴマはどの世帯にも入手可能であると論じている。

第 7 章は、換金作物栽培が普及するさなか、サンダ

ウェの人びとが「よりよい」土地と表現する、肥沃で長期連作が可能な広大な土地をもとめて、人びとが農地を拡大していく様子を描いている。農地を拡大する開拓者・土地の保有者などのアクターの影響を受けて、サンダウェの人々が土地に「資源」という価値をみいだしていると著者は指摘している。そして、若者による共同畑の運営によって賃金労働が浸透しはじめるなど、新たな社会関係が創出されていると論じている。

終章では、これまでの章を総合的に考察し、サンダウェが 1970 年代に経験した社会的変化が、今日にみられるサンダウェの循環的な環境利用システムを生みだし地域を支えていると指摘している。そしてグローバルな「先住民」像から除外されたことと関連づけて、サンダウェが他の狩猟採集民にはない、農耕を基盤とした生業に移行したとしている。

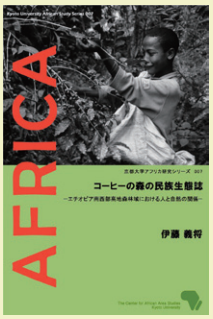
本書は、これまでおこなわれてきた多くのアフリカ狩猟採集民研究のように、狩猟採集活動のみに注目せず、自然環境の利用と認識をあきらかにすることで、現代の狩猟採集民社会における農耕の重要性を導きだした。また、いわゆるアフリカの「先住民」としてあつかわれなかったことで、行政の政策がさほど行き届かず、サンダウェの人びとが独自の生業体系を築いてきたことを著者は指摘している。著者が言うようにサンダウェ社会が行政から「放ったらかし」状態にあったからこそ、社会的変化に対する彼らの柔軟な対応が実現されたのだった。アフリカ地域に限らず、現代の「先住民」像をみなおすうえでも、参考にすべき一冊である。

（つのだ　さらま）

伊藤義将　著

『コーヒーの森の民族生態誌 —エチオピア南西部高地森林域における人と自然の関係』

松香堂　2012 年、129 ページ、1800 円＋税



石原 美奈子
南山大学人文学部

エチオピアに残存する森林の大半は南西部にある。本書は、コーヒーの起源地であるとともに、コーヒーが自生するエチオピア南西部の山地林に住む人々がどのように住んでいる環境に制限されながらもそれを利用しながら生活しているのか、について解き明かした民族誌である。森林保全は、開発援助の世界に限らず国際的に通用する道理として、その正しさに疑義をはさむ者はあまりいない。ただ森林保全を、単に、森林環境への人的介入、すなわち「人為的攪乱」の制限という形で、進めるべきなのかどうかについては議論すべきとされてきた。すなわち「人為的攪乱」は、必ずしも生態環境のバランスを破壊するものではなく、むしろ一定程度の介入は逆に森林の保全につながるものであるとする立場である。本研究が取り組んでいるのは、コーヒー自生地に住む人々の森林環境への介入の仕方を詳しく描き出すことである。コーヒー自生地に住む人々が、森林のもつ特有の環境に制限を受けながらも、森林の生み出す恵みを資源として活用している状況が、本書のなかで生き生きと描き出されているのである。

本書の構成は以下の通りである。

第一章　はじめに
第二章　調査地の背景
第三章　ゲラ行政郡の歴史とコーヒーの森の変遷
第四章　コーヒーの森の利用―ハチミツとコラリマの採集―
第五章　コーヒーの森の利用―コーヒー・チェリーの採集活動―

第六章　コーヒーの森における人為的攪乱と植生の遷移

なかでも著者の調査成果が反映されているのが第四章～第六章である。ここで著者はコーヒーが自生する森（以下、コーヒーの森）に、コーヒーの木だけでなく、多種の樹木や植物が自生している点に着目し、住民がそれらをどのように利用しながら現金収入源としているのかについて描き出している。住民の現金収入源となっているのは、コーヒー以外では、コラリマと呼ばれるショウガ科の植物がある。またこの地域は高品質のハチミツがとれることで知られているが、住民はコーヒーの森をハチミツの採集にも利用している。

第四章では、住民がどのようにハチミツとコラリマを採集しているのかについて詳述している。調査地では、ハチミツは蜂の巣筒を樹上に仕掛けることで採集される。蜂の巣筒を誰がどのような材料で作り、いつどこにどのように仕掛けるのか。そしてそのハチミツがどのようなもので、森の所有者・蜂の巣筒の作り手・仕掛ける者等の間でどのように分配されるのか。森の中にランダムに仕掛けられているかのようにみえる蜂の巣筒だが、本章は、そこに細かな決まり事があることを明らかにしている。それに対し、森のなかに自生するコラリマは、そのような採集・分配に関する決まり事はなく、採集した者が所有することができる。

第五章では、コーヒー・チェリーを採集する人々がどのような人々で、どのように採集・分配を行っているのかについて詳述している。コーヒー・チェリーの採集は、コーヒーの森の所有者・その家族・親戚・友人・知人および親戚関係をもたずゲラ行政郡内外から採集時期になるとやってくる「サラテニア」によって行われる。これらの人々がどのようにコーヒーの森に滞在しながらコーヒーを採集し、コーヒーがどのようにこれらの人々の間で分配され、どれくらいの現金収入となるのかについての描写は具体的で興味深い。

第六章では、コーヒーの森のうち「バッダ」（過去８年間人為的攪乱のない場所）と「カンニ」（過去８年間毎年採集・伐採などが実施されている場所）にそれぞれ調査区を設けてそこにみられる樹木の種類とその経年変化について調べている。その結果、ハチミツ採集などの目的で樹木を伐採したり、コーヒーの採集に欠かせない「チル」と呼ばれる下草刈りをするなどの「人為的攪乱」がコーヒーの木の繁茂に好適な条件となっていることが明らかになった。

評者も著者の調査地であるジンマ県ゲラ行政郡に広がる森に何度か足を運んだことがあるが、無秩序に自生しているかに見えるその森に所有権や利用に関する決まり事があることを実証的に解き明かしてくれる本書を高く評価している。ただ、そもそもその所有権がどのような根拠に基づいて主張されるものであるのか、またコーヒーの木が自生していない森の部分についてはそのような所有権の適用がないのか、などについては疑問が残る。とくに最近政府が、森林保全の事業を推進しながら、同じ地域で道路開通などの開発事業を展開している現状をみると、森林を破壊する「人為的攪乱」の主体は住民でなくなっているともいえる。コーヒーの森以外での森林破壊は、現金収入源の奪取につながらないとして正当化されるかもしれない。だが森林保全という大義名分は反故にされたことになる。本書のように、森林と人の関係性を明らかにする民族誌は、「森林保全」や「開発」といった、政府や援助機関が掲げる大義名分を相対化するうえで重要であり、今後もこうしたトップダウンの政策・事業を住民の視点から批判的に再検討を迫る民族誌が蓄積されることは大いに期待される。

（いしはら　みなこ）

遠藤保子・相原進・高橋京子 編著
『無形文化財の伝承・記録・教育
—アフリカの舞踊を事例として』

文理閣 2014 年、227 ページ、2500 円＋税

川瀬慈
国立民族学博物館

アフリカの多くの地域社会において、舞踊は社会的・宗教的な機能をもち、日常生活のさまざまな局面と密接に結びついている。また、国立の民族舞踊団のように、時の政権や政策と歩みをともにしつつ、国民の愛国心を助長させ、結束を固めるために舞踊が政治的に利用される事例も各地で見うけられる。

アフリカの舞踊の研究事例を軸に、無形文化の伝承、記録、教育に関する考察を行う本著は、アフリカを対象にした舞踊研究が国内において非常に少ない状況を踏まえると、たいへん貴重な一冊といえる。本著の第 2 章や第 3 章では、ナイジェリアやガーナの舞踊の「モーションキャプチャ」によるデジタル記録・解析の報告がされる。動画を用いた無形文化の記録と保護は、私が専門とする映像人類学の分野でも主要な課題となっている。芸やワザの再現という観点からは、身体の微細な動きを捉え、さらには 360 度、どのアングルからも動作の再現を可能にさせるこのモーションキャプチャという記録方法は、大変有効な手法となるであろう。将来、なんらかの理由でこれらの舞踊の再現が必要とされる場合、踊り手にどのように参照され、さらにそれは現地の社会において、あるいはアフリカから遠く離れた場でどのような意味を持ちうるのであろうか。興味は尽きない。

第３章、第４章では、エチオプス・アート日本委員会という組織をたちあげ、日本国内において、エチオピア、ケニア、タンザニア、ガーナの民族舞踊公演を実施した著者の経験が振り返られる。これらの公演は、アフリカの文化的多様性の紹介、国際文化交流や相互理解、さらには舞踊の新たな隆盛への貢献が目的としてあったことが挙げられている。本著も指摘するように、今日は我が国の景気後退にともなう財政難のため、公演助成をかつてのように多く受けにくい現状にある。しかしながら本著の、アフリカの舞踊団を招聘する当事者として、その目的、意義、具体的な演目のリストやそれらのプレゼンテーションにおける工夫についての詳細な記述は、今後同様の企画を構想する者にとっては、大きな参考になるであろう。さらに、公演をコーディネートする主催者としての葛藤が記述されている点も興味深い。本著では、エチオピアの民族舞踊公演において、多様な民族文化を有するエチオピアの舞踊が、高地文化を反映する演目に偏りがちになる点についての指摘がある。この傾向は確かに、エチオピア都市部のナイトクラブやホテルにおける民族舞踊ショーにおいても久しく顕著であった。これらの民族舞踊は直接的に地域社会において展開している民族の舞踊を表現しているとは限らない。それはトウザワジと呼ばれるプロの踊り子たちによる創意工夫、さらには、その舞踊を“消費する”聴衆のまなざしや期待のなかに顕現するハイブリッドな創造物なのである。

本著には他にも、舞踊を、異文化理解の教材として用いる際の報告（第 7 章）やガーナでの研究成果の公表、日本の舞踊紹介についての報告（補章）が含まれる。アフリカ舞踊を通してアフリカの社会や宗教さらにはコミュニケーションの動態について学ぶことは、言うまでもなく、我が国の無形文化の伝承と保存をめぐる課題について考える契機を与えうる。

以上より本著は、アフリカの舞踊の研究に興味を持つ者だけでなく、アフリカの舞踊団招聘や学校等での紹介を構想される方にとってもおすすめの一冊である。

（かわせ　いつし）

石田憲 著

『ファシストの戦争 ―世界史的文脈で読むエチオピア戦争』

千倉書房 2011 年、270 ページ、3200 円＋税

石川博樹
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

石田憲氏は日本における戦間期イタリア政治外交史研究、ファシズム研究の第一人者である。本書は 3 章から構成されており、各章は 1994 年から 2010 年にかけて著者が執筆した第二次イタリア・エチオピア戦争に関する 3 本の論考が基になっている。

19 世紀末にエチオピアとその植民地化を図るイタリアとの間に生じたアドワの戦いをはじめとする一連の戦いが生じた。これらを総称して第一次イタリア・エチオピア戦争と呼ぶ。それに対して、1935 年に始まり、1936 年に終結したイタリア軍のエチオピア侵攻を第二次イタリア・エチオピア戦争と呼ぶ。後者は最後の植民地獲得戦争、あるいは国際連盟が世界初の経済制裁を実施した戦争として知られている。そしてこの戦争はイタリアのファシストたちが主体的に戦いを主導し、勝利の実感を抱くことができた唯一の戦争であった。それとともにこの戦争はイタリアのファシストと反ファシスト双方にとって思想・運動・体制上の分水嶺となる重大な変化をもたらした。またこの戦争は国際的に大きな反響を呼び、世界史の転換点にもなっている。本書において著者は、第二次イタリア・エチオピア戦争をイタリアとエチオピアという二国間の問題に還元することなく、世界史的視座から分析し、「ファシストの戦争」として位置づけることを試みている。

権力奪取後、ムッソリーニはファシストたちの多様な志向性と行動を調整・利用・操作しながら自らの主導権を発揮していた。第 1 章「サブリーダーたちの戦争」において著者は、第二次イタリア・エチオピア戦争に従軍したサブリーダーを 3 つの類型に分け、それぞれの政治的行動、そして彼らに対してムッソリーニが行った調整について検討する。本章において、著者は第二次イタリア・エチオピア戦争を契機にファシズム体制が本来の思想や政治的方向性よりも表層的な自己賛美を優先するように変質したこと、この戦争を通してムッソリーニが達成した独裁強化が、長期的には彼自身の転落とファシズム体制の崩壊を招いたことを指摘する。

第 2 章「幻の国際義勇軍」は、スペイン内戦のものに比べるとはるかに小さいものの、国際的な広がりを見せたエチオピアに対する国際義勇兵運動について分析を加える。本章において著者は、ファシストの戦争に対抗した国際義勇軍形成という視座からエチオピア戦争が与えた世界的な影響を俯瞰する。そうすることによって第二次イタリア・エチオピア戦争に対する国際的な抵抗運動の多様性を明らかにするとともに、ナチスドイツとの比較、あるいは第二次世界大戦における弱体ぶりがゆえに強調されてこなかったファシスト・イタリアの侵略性、人種主義的傾向という特徴を指摘する。さらに後発帝国主義国による最後の植民地獲得戦争という枠組みにとどまらない、抑圧された人々が解放へ向けて動き出した転機として、エチオピア戦争を措定することができると主張する。

相前後して開始された第二次イタリア・エチオピア戦争と日中戦争は、イタリアと日本が第二次世界大戦への道を決定的に歩み出す契機となった。第 3 章「文学から見た戦争：エチオピア戦争と日中戦争をめぐって」は、両国の文学者たちがこれらの戦争をどのように認識し、それらの認識がどのような意味を持っていたのかについて考察する。本章において著者は、両国の文学において、戦争を肯定する排外的ナショナリズムという共通性が見出せること、それとともに思想の連続性、および体制への批判・抵抗の有無において両者に相違があったことを明らかにする。さらに著者は、

第二次イタリア・エチオピア戦争が「ファシストの戦争」であったがゆえに、ファシスト体制への抵抗の新しい思想的基盤を提供する端緒ともなったと主張する。

このように本書はイタリア国内から国際社会へとフォーカスを移しつつ、歴史から比較へと対象の分析方法を変えていく。そうすることによって著者は世界史的視座から第二次イタリア・エチオピア戦争を多角的に分析し、この戦争の「ファシストの戦争」としての性格を浮かび上がらせることに成功した。従来語られてきた単純な独裁論や体制構造論とは一線を画す本書は、ファシズム研究、第二次イタリア・エチオピア戦争研究に重要な貢献をしたと言えよう。

本書においてエチオピアは舞台としては取り上げられるものの、エチオピア人が不在のまま議論が進められている。著者自身その問題を認識しており、「最大の被害者であるエチオピア人は中心におかれないまま、各章の主要登場人物たちが自分たちの物語を一方的に形づくっていた」と述べている（p. 201）。

往々にして第二次イタリア・エチオピア戦争がエチオピア人不在のまま語られるという現実を、我々は直視し、その意味を深く考察すべきであろう。そしてそれをふまえたうえで、エチオピア人が果たした役割に十分光をあてつつ、この戦争を世界史的視座から論じることがエチオピア史研究者には求められているのではなかろうか。

（いしかわ　ひろき）

会員の異動

■　入会者

氏名	入会年	所属
青島 啓太	2014 年	芝浦工業大学工学部建築工学科
竹中 浩一	2014 年	独立行政法人国際農林水産業研究センター
野口 真理子	2014 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
慶田 勝彦	2014 年	熊本大学文学部
Robel Haile Gebru	2014 年	大阪大学
江端 希之	2014 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
Aklilu Habtu	2014 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
飛内 悠子	2014 年	日本学術振興会 / 大阪大学
坂本 拓人	2014 年	日本学術振興会特別研究員 PD/ アジア経済研究所
吉野 宏志	2014 年	筑波大学大学院人文社会科学研究科
浅田 静香	2015 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
中澤 芽衣	2015 年	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

■　退会者

氏名	退会年
関根 悠里	2014 年
藤山 辰次	2014 年
松村 圭一郎	2014 年
野木 將典	2014 年